

曲目解説

Le Cygne

白鳥

Camille Saint-Saëns（1835–1921） カミーユ・サン＝サーンス

曲目解説

Le Cygne 白鳥

Le Carnaval des animaux, No. 13 ／ 組曲『動物の謝肉祭』第13曲

Camille Saint-Saëns（1835–1921） カミーユ・サン＝サーンス

作曲	1886年2月
原曲の編成	チェロと、ピアノ2台
調・拍子	ト長調・4分の6拍子
この楽譜	タファネル（P. Taffanel）編曲のフルート独奏パート（Durand）から入力し、Durand 1922年初版の総譜と照合。笛だけの版と、第1ピアノの伴奏付きの版がある

作曲者

カミーユ・サン＝サーンスは、パリに生まれたフランスの作曲家・ピアニスト・オルガニストです。
幼いころから神童と呼ばれ、10歳でパリでの演奏会にデビューしました。
パリのマドレーヌ教会のオルガニストを、およそ20年にわたって務めています。

1871年には、仲間とともに「国民音楽協会」を設立し、ドイツの音楽に負けない、
フランスの器楽を育てることに力を注ぎました。代表作に、交響曲第3番『オルガン付き』
（白鳥と同じ1886年）、歌劇『サムソンとデリラ』、交響詩『死の舞踏』、『序奏とロンド・カプリチオーソ』
などがあります。文学や天文学にも通じた、博学の人でした。

曲の成り立ち

1886年、ドイツへの演奏旅行が不評に終わったあと、サン＝サーンスはオーストリアの小さな村で静養し、
そこで『動物の謝肉祭』を書き上げました。同じ年の3月、パリでチェロ奏者シャルル・ルブークが開いた、
仲間うちの演奏会で初演されています。

ライオン、象、カンガルー、水族館など、14の曲で動物たちを描いた、ユーモアたっぷりの組曲です。
ほかの作曲家の曲や、自分の作品をもじった冗談も多く含まれます。サン＝サーンスは、
真面目な作曲家としての評判に障ることを心配して、生前は組曲の出版と公開の演奏を禁じました。

ただひとつの例外が、この『白鳥』です。1887年にチェロとピアノのための版が出版され、
生前から広く親しまれました。組曲全体は、作曲者が亡くなった翌年の1922年に出版され、
同じ年に公開の初演が行われました。この楽譜の伴奏は、その1922年の初版の総譜から入力しています。

フルートで吹く版は、パリ音楽院のフルート教授で、
近代フランスのフルート奏法の礎を築いたポール・タファネル（1844–1908）の編曲です。また1905年には、
振付家ミハイル・フォーキンが、この曲を使ってバレリーナのアンナ・パヴロワのために『瀕死の白鳥』
を振り付け、パヴロワの代名詞となる踊りになりました。

曲調と聴きどころ

原曲では、第1ピアノの16分音符の分散和音が、絶え間なく揺れる水面を、第2ピアノの掻き鳴らす和音が、水面にきらめく光を描きます。その上で、チェロがゆったりと長い旋律を歌います。湖の上を、白鳥が静かに滑っていく姿が浮かぶ音楽です。

旋律は、高い音から穏やかに下りてきては、また浮かび上がる、という動きを繰り返します。のばす音の長さと、跳躍のあとの静かな下降が、白鳥の首のしなやかな曲線を思わせます。フルート版では、チェロより1オクターブ高い音域で、より透明な響きになります。

曲の流れ （小節番号は、この楽譜の小節番号）

小節	内容
1	ピアノだけで、水面のさざ波を描く（前奏）
2〜9	主題。高いソから穏やかに下りてくる旋律。7〜8小節でロ短調の方へ移り、9小節の高いレで大きく息を張る
10〜17	中間部。短い句が少しずつ音を下げながら、調を移ろっていく。水面に雲の影が差すような、揺れる部分。17小節で元の調へ戻る準備をする
18〜20	主題が戻る（2〜4小節と同じ音）
21〜25	高いシを1小節のばしたあと、mf で少し高まり、だんだん静まる。25小節で速さをゆるめ（Rit.、Lento）、ためをつくる
26〜28	a tempo、pp。高いソを長くのばす間に、ピアノが高い音域で光のように揺れ、白鳥が遠ざかるように消えていく

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　ト長調

ソを主音とする長調で、調号は♯が1つ（ファ）。中間部では、ロ短調などへ一時的に調が移ろいます。

拍子　4分の6拍子

1小節に4分音符が6つ。「3つ＋3つ」の大きな2拍で感じると、白鳥がゆったり水を進むような流れになります。

分散和音の伴奏

ピアノの16分音符の分散和音は、水面のさざ波を表しています。旋律は伴奏の細かい動きに引きずられず、長い息で歌うのがこの曲の魅力です。

篠笛の楽譜と調について

同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。

篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。

笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	ト長調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。伴奏（A＝440Hz）と合わせるときは、一 がおよそドの笛（目安：八本調子前後）を使います。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。変ロ長調（原曲より短3度上）、チューナーの基準 A＝436Hz（全体を25セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026